

なぜ舞姫はハッピーエンドではないのか？

①はじめに

<動機>

私がこのテーマを設定しようと思ったのは、舞姫の終わり方に疑問を感じたからである。鴎外は、このストーリーを、「豊太郎はドイツの自由な空気に触れることで、自我が目覚め、自由を強く望むようになった。そんな中出会った女性エリスと共に、ドイツで幸せな人生を送った。」とハッピーエンドにすることも可能だったはずである。しかし、そうはせずにアンハッピーエンドにしたということは、何か理由があるのではないかと思い、それを追求してみたいと考えたからである。

<結論>

私は、結果的に、「アンハッピーエンドの方が、本当の自分を尊重して自分の望む生き方をして欲しいという鴎外の主張を読者の心に残しやすいため。」という結論を得た。

②本論

(i) 鴎外の主張

鴎外は、「ロマン主義」という考えを強く持った人物であった。ロマン主義とは、19世紀の初めにヨーロッパから広まった考え方である。日本には明治15年に初めて紹介され、明治22年に鴎外ら5人による訳詩集「於母影」が紹介された。鴎外が舞姫を書いたのはまさにその後である。よって、舞姫は鴎外のロマン主義思想が強く反映された作品であると考ええる。

ところで、ロマン主義とは、人間の感情や想像力といった内面性や恋愛を重視し、形式を打破し、自我や個性の尊重と解放を主張する風潮である。

実際に、舞姫の中にもロマン主義の考え方が表れている。それは特に、「奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。」という一文である。

「我ならぬ我」とは、お手本を真似ることを重視する古典主義などの旧来の価値観に囚われた自分であり、「まことの我」とは、「我ならぬ我」に今まで隠されていて自分自身でも気づけなかった、人の内面の奥底に存在するであろう本当のじぶんであるという意味に捉えることができる。つまり、「我ならぬ我」から「まことの我」を解放して、自我や個性といった人の内面を尊重してあげること、すなわちロマン主義の考え方を読者に推奨している文章であるといえる。

従って、鴎外は舞姫を書くことで、ロマン主義の考えを広め、本当の自分を見つけて本当に望む生き方を送って欲しいということを主張したかったと考える。

(ii) アンハッピーエンドの利点

私は、アンハッピーエンドには、読者に満足感を与えない効果があると思う。仮に、「豊太郎がドイツに残り、エリスも発病せずに、豊太郎と一緒に幸せに暮した。」という結末で

あったら、読者はそのストーリーに満足感を得るだろう。それは、読者は少なからず主人公に感情移入して読んでいるからだ。しかし、(i)で説明したように、鴎外は舞姫によって、ロマン主義の考えを広め、本当の自分を見つけて本当に望む生き方を送って欲しいと主張したいと思っていたのに、読者に満足感を与えてしまうと、人々の心にその主張は届きにくいし、心に残りにくいと考える。

実際、同時期の作家、夏目漱石の「こころ」や、他の国内外の作品においても、結末がハッピーエンドではなく、どこか心に引っかかる終わり方をしている作品が多く見られる。

つまり、アンハッピーエンドの終わり方には、読者に満足感を与えず、読者の心に引っかかる結末にすることで、筆者の主張を読者の心に残しやすいという利点があるといえる。

③まとめ

(i)より、鴎外は舞姫を書くことで、ロマン主義の考えを広め、本当の自分を見つけて本当に望む生き方を送って欲しいということを主張したかったといえる。

では、なぜそれを伝えるために鴎外は豊田郎とエリスのハッピーエンドを書かなかったのか。それは、(ii)より、アンハッピーエンドの終わり方には、読者に満足感を与えず、読者の心に引っかかる結末にすることで、筆者の主張を読者の心に残しやすいという利点があったからであるといえる。

つまり、「なぜ舞姫はハッピーエンドではないのか？」という問いへの答えは、「アンハッピーエンドの方が、本当の自分を尊重して自分の望む生き方をして欲しいという鴎外の主張を読者の心に残しやすいため。」という結論を得た。

○ 参考資料

- ・国語便覧
- ・京都精華大学「文化表現論Ⅱ」第13回講義録(2005)